



## 第100回

### 攻守担う「リベロ」として

※2024年6月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘していただきます。

「ツネ様」「バットマン」とい  
えば、思い浮かべる人も少なく  
いだろう。元プロサッカー選手、  
宮本恒靖さんのことである。20

もそのチームの一員やから、距離  
を置いて『会長』と呼んだり接し  
たりしないでほしい」という思い  
がある。

1 / 4

24年3月に47歳で日本サッカー  
協会の第15代会長に就任。それか  
ら2カ月あまり立った5月の終わ  
り、協会が入る東京都内のビルで  
取材した。

「ツネ様」は、00年代の韓流ブ  
ームのきっかけとなった人気俳  
優、ペ・ヨンジュンさんの愛称「ヨ  
ン様」に預かったといわれる。今  
でも「たまにいじってくる人はい  
ます」と明かした。

日本代表主将を務め、さまざま  
な愛称で親しまれた宮本さんが、  
協会内で何と呼ばれているのが  
気になった。聞けば、「宮本さん」  
「ツネさん」と呼ぶ職員が多いと  
いう。宮本さんは職員に「会長っ  
て呼んでほしくないと伝えたそう  
だ。サッカーを通じた社会貢献や  
代表チームの強化は、協会に関わ  
る全員に共通する目標だ。」自分

どんな会長を目指すのか、ピッ  
チ上で例えてもらった。サッカー  
界のレジェンド、フランス・ベッ  
ケンバウアーさんが担ってきた  
「リベロ」だという。  
ベッケンバウアーさんは、西ド  
イツ(当時)代表の主将として地  
元開催の1974年W杯で、監督  
としては90年ワールドカップ(W

杯) イタリア大会で、それぞれ世界一に導いた。06年ドイツ大会では組織委員会会長として大会を成功させたことで知られる。現役時代は優雅なプレーと冷静沈着な統率力から「皇帝」と呼ばれ、各ポジションごとの守備範囲が徹底されていた当時、DFとしてプレーしながら攻撃にも参加するポジション・リベロを確立させた。

宮本さんは言う。「最終ラインでチームをコントロールしつつ、前に出て攻撃に参加する。ピッチの縦横をしっかりとカバーできないといけない。ずっと後ろにいて、ディフェンスしているだけではない。攻撃に出て行くこともあるし、ゲームを作ることも必要です」。現役時代には同じDFとしてプレーし、最終ラインを統率することが多かった宮本さん。現役引退後に組織運営でも手腕を発揮したベッケンバウアーさんは参考になるのかもしれない。

会長に立候補した時のマニフェストには「継承Ⅱ『守り』と併せ

て革新Ⅱ『攻め』のアクションをを起こしていくことが新たな成長につながる」とも信じています」とあった。競技人口の増加などといったサッカーの普及活動を継続する一方で、収益拡大のためにマーケティングでのアジア進出、展開を目指すであろう。

「サッカーを日本でもっと大きな存在に」。宮本さんのこの思いは選手時代から一環している。

きっかけは、日本にとって大会連続2度目の出場となった02年のW杯日韓大会である。W杯初出場の宮本さんは大会直前に鼻を骨折し、黒のフェースガードを着用した姿が「バットマン」と呼ばれ、注目された。

大阪で行われた予選第3戦で勝ち、初の決勝トーナメント進出を果たした後のことだ。新大阪駅からキャンプ地の最寄り駅である静岡の掛川駅まで新幹線で移動すると、停車するたびに駅のホームで多くのファンが日本代表の快挙を祝福してくれたのだという。

「日本人がいつもはなかなかしないような騒ぎ方をしていた」

宿舎からバスで移動する際は、沿道から多くの人が手を振ってくれた。

「代表の活躍でたくさんの方が喜んでいたりしている姿を見て、こういう世界が当たり前になればいいなと思いました。W杯の時だけでなく、いろんなところでサッカーが話題に上ってほしいし、サッカーの力、スポーツの力が、いい形で社会に還元されてほしかった」

現役引退後、国際サッカー連盟（FIFA）運営する大学院「FIFAマスター」でスポーツの歴史や経営などを学んだのも、その思いを実現するためだった。当時は協会の会長になることは考えていなかったというが、「会長ではなくとも、サッカー界で重要な意思決定ができるようなポジションにつくことをイメージしながら」キャリアを積んできた。

21年の協会の100周年記念式典で田嶋幸三会長（当時）が「我々

には今まで100年紡いできた先人の歴史を次の時代に伝えていく責任がある」と話すのを聞き、サッカーを大きな存在にするために目指すところは協会の会長だと明確に見えてきたという。

「やりがいのある仕事に自分もオミットしたい。責任のない仕事は面白くないです」

日本代表がW杯で活躍するたびに日本中が湧くものの、サッカー熱が定着したとは言いがたい。人気を高めるためにも、宮本さんは日本代表の強化が欠かせないと考える。

「代表チームは強くあり続けなければいけないし、W杯で結果を出し続けることはマストです」

男子の26年W杯は出場チームの数が32から48に増え、優勝するにはこれまで8試合だったが、9試合戦わなければならず、より総合力が問われる。「個々の力を上げることで、その絶対数ですね。より多くの選手がヨーロッパの高いレベル、トップクラブでプレーし

ているような状況が重要です」と発破をかける。

取材の最後、持参した1冊の本を宮本さんに差し出した。雑誌に連載されていた宮本さんのインタビューなどをまとめ、10年以上前に出版された「宮本恒靖 学ぶ人」だ。その中にあった最後の写真は引退して間もないころに撮影されたものだろうか。写真の表情を見て、宮本さんは言った。「甘ちゃんですね」。今とあまり変わらないうように見えますが、と返すと、「厳しさが増しましたよ」。批判されたとしても、嫌われたとしても、今後もサッカーを日常としていくことへの愚直な覚悟が見えた。